詩仏年譜稿 2

——化政期文人の交遊考証——

揖斐　高

寛政年間後半の詩を収める『詩聖堂百絶』についで、享和年間以後の詩仏年譜の基礎資料となるのは、文化七年刊の『詩聖堂詩集初編』十巻である。しかし、遺憾ながら、『詩聖堂詩集初編』も全編を通じての編年体の排列ではなく、ために集中の記事がすべて年譜作成上の資料として使用できるわけではない。『詩聖堂詩集初編』のうち編年体で排列されているのは巻七よりあと、すなわち文化三年以降の作で、巻六まですなわち文化二年以前の作の排列は、時間的には全く前後錯綜している。しかも、その中には、享和以前の作も混入しており（たとえば巻五「訪二六如師嵯峨山居一途中遇レ之」）、集中の排列のみからその詩の作詩時期を推定することは不可能だと言わねばならない。

文化三年三月四日、江戸は大火にみまわれ、翌五日に鎮火したが、〃類焼凡そ長さ弐里半幅平均七町半、諸侯藩邸八十三宇、寺院六十六箇寺、名ある神社二十余ケ所、町数五百三十余町と聞ゆ。又焼死溺死千二百余人といへり〃（『武江年表』）という状況であった。この大火には詩仏も罹災しており（巻七「丙寅三月四日都下大火」と題する七絶の承句に〃一時延焼及二吾廬一〃とある）、その折の詩稿の散乱あるいは散逸が、文化二年以前の作の排列が混乱していることの原因ではないかと思われる。

本稿は前稿「詩仏年譜稿1」を承けて、享和元年より文化二年までの五年間を扱うことにする。『詩聖堂詩集初編』中には、この間の詩仏の交遊・行動を示すと思われる作は多いが、今述べたような理由で現在のところ年次の確定できるものは甚だ少い。しかし、本稿はみだりな推定は避けて確実な項目のみで年譜を構成することにし、年次の確定の困難なものは別にまとめて後に掲げることにした。なお典拠表示にあたって、『詩聖堂詩集初編』巻一の場合は、初一というように略記することにした。

享和元年　辛酉　三十五歳

○春、月旦社を再開。再開を祝して大聖寺侯前田利考は、家臣東方望を遣わして「春寒詩」一首を詩仏に贈り、詩仏はその詩に次韻して感謝の意を示した（初六「享和改元之春再開二月旦社一大聖寺侯遣二其臣東方望一恵二春寒詩一首一次レ韻奉謝」）。この再開した月旦社とは詩仏の主宰する詩社だろうが、どういう性質のものか明らかにしえない。東方望は、天保三年版『続諸家人物志』に〃東方祖山　名ハ望字ハ満卿祖山ト号シ屯ト称ス賀州ノ人江沼ノ世臣北山ノ門人博

洽ヲ以テ聞ユ祖山筆記祖山文鈔ヲ著ス〃とあり、『大日本人名辞書』には〃大聖寺藩の文学たり。文化十年六月二十五日没す、年六十六〃とある。

また囮四には年次未詳ながら、「菅神廟前梅応ニ大聖寺侯命一賦」と題する五古一篇を収める。

○二月刊の『放翁先生詩鈔』八巻四冊（奥附刊記〃享和元年二月刻成〃）の校定を、中野桑堂・山本緑陰と共に担当。本書は清の周雪蒼・柴錦川の編だが、それをこの三人が校定し、山本北山閲として和刻したのである。校定の作業は前年の寛政十二年の夏に行われたらしく、その間の事情は本書の北山序に明らかである。

今茲、庚申の夏、子興・天民・児謹、清の周雪蒼・柴錦川の放翁詩鈔を取りて謹が緑陰茶寮に相会し、本集より以下剣南詩抄・放翁詩選前後集を将つて讐校し、旁ら宋詩紀事・宋詩抄・瀛奎律随等、凡そ放翁の詩有る者に及ぶ。（原漢文）

享和二年　壬戌　三十六歳

○九月、桐生に赴き、同月十三日にはこの地の斎藤天籟・佐羽蘭卿（淡斎）・奥山寄亭・子徳（姓未詳）と共に妙音寺の後山に遊ぶ（「九月十三日与天籟蘭卿寄亭子徳登妙音寺後山」―『桐郷風雅集』）。『桐郷風雅集』はこの年の暮頃に刊行された桐生詩壇の小詞華集だが、詩仏は右の七絶一首のほか、「桐生作」「客夜」「艇楼偶得」「雪日」と題する七絶四首を収め、このうち「桐生作」は囮五にも「桐生」と題して収める。ちなみにこの集は山本緑陰の七絶四首も収め、山本北山の〃享和二年壬戌臘月望北山山本信有操ニ毫於学平堂〃と記す序文を冠する。

○十一月二日付、江戸の巻菱湖が新潟の呉榕堂へ宛てた書簡（〈手紙雑誌〉明治四十二年十月号所収）の中で、詩仏を柏木如亭と比較して、〃如亭近作懸御目てくれろとて少々よこし候。是も此ほど業も行はれ、天民よりははるか勢よろしく候。どふしても終始は才気あるものが勝ことゝ被存候〃という。

享和三年　癸亥　三十七歳

○春、大窪天民輯・辻山松校の『宋詩礎』二巻二冊刊。奥附の刊記に〃享和三年癸亥春〃とあり、享和二年の山本北山の序文を付す。辻山松は寛政十年に既出の辻元崧庵。本書は宋詩をもとにした韻書である。

○秋、市河米庵の西遊に際し、七絶四首を贈る。その詩は『西遊折瓊』の虹巻に「送ニ河孔陽西遊一」大窪行草」と題して収め、うち二首は囮三に「送ニ河孔陽西遊一」の題で収める。米庵はこの年八月十九日江戸を発って京都に遊び、ついで長崎まで脚をのばし、翌文化元年十一月二十七日江戸へ戻るが、その折に諸名士に徴した詩・文・画を三巻に装潢したものが『西遊折瓊』である。第一巻を虹巻といい出発前に江戸で集めたもの、第二巻は貫巻といい京都滞在中のもの、第三巻は月巻といい長崎と帰路でのものを集める。米庵の旅の行程と『西遊折瓊』の内容については「市河米庵伝㈣～㈦」（〈東洋文化〉第一七四号～第一七七号）に詳しい。『西遊折瓊』は市河三陽の手で大正七年三月に翻印されているが、各巻の内容をここで簡単に紹介しておくことにする。

（虹巻）享和三年

松平楽翁（題字）　林述斎（詩）　鏑木雲潭（画）　柴野栗山（文）
谷文晁（画）　松平冠山（文）　松平需堂（詩）　佐藤一斎（文）
鈴木芙蓉（画）　大窪詩仏（詩）　市河寛斎（文）

〔貫巻〕文化元年
藤原通斎（題字）皆川淇園（文）松村月溪（画）村瀬栲亭（詩）岸駒（画）伊藤東所（詩）大原呑響（画）佐野山陰（詩）岸岱（画）清田龍川（詩）小栗十洲（詩・画）巌垣龍溪（詩、書は雨森栗斎）奥文鳴（画）伊沢子琢（文）柴田義董（画）中島雪楼（詩）釈玉渕（画）

〔月巻〕文化元年
胡兆新（題字）程赤城（題字）頼春水（詩）頼山陽（文）岡岷山（画）姫井桃源（詩）村上松堂（画）奥田尚斎（詩）浜田杏堂（画）篠崎三島（詩）鼎春嶽（画）森川竹窓（詩）釈月僻（画）牧野澹斎（詩）菊池五山（文）
「文化二年市河寛斎（詩）「文化十一年菅茶山（文）

○山本緑陰と共に『宋三大家絶句』を編集し、この年刊か。所見本に刊記がなく刊年は確定できないが、山本北山の序に〝享和癸亥重九日　北山山本信有撰〟とあり、『割印帳』には〝享和三亥年十一月廿七日不時割印〟となっている。

○『茶寮図賛』を著し、この年刊か。本書は曽永年の煎茶解説書『烹茶樵書』との合冊で刊行された。本書も所見本刊記がなく刊年を確定できないが、〝享和癸亥十月朔詩仏居士題　弘斎巻大任書〟と記す詩仏の自跋に、〝吾が友曽永年先生の著す所の烹茶樵書の如きは、能く一箇の清字を説くと謂ふ可きなり。余請ひて之を刻し、竊かに附するに茶寮図賛を以てす〟（原漢文）とあるように、本書の『烹茶樵書』との合冊刊行は、詩仏自身の意向によるものであった。内容は、煎茶道具十八種を人物に見立てて役職と姓名字号を与え、半丁毎に各々の図を挿み、裏半丁にその由来を漢文で説いてあるという好事的色彩の濃いものである。巻頭には詩仏自身による題詩（七絶一首）を掲げる。『烹茶樵書』の著者曽永年は本草学者曽占春のことで、この年四十六歳。『五山堂詩話』巻五にも占春・詩仏交遊の記事がある。

○この年、長町竹石を知り、七古一篇を贈る。『五山堂詩話』巻二に次の様な記事がある。

竹石、癸亥を以て都に出で画名大いに起る。明年郷に帰り、未だ幾ばくもならずして没す。其の都に在るの日、最も知を詩仏に受く。詩仏、七古を贈りて云はく……　（原漢文）

竹石は讃岐の人で画家、特に墨竹をよくした。酒豪でもあり、ために右の七古の冒頭には、

竹石道人酒中仙。酔後揮レ毫妙到レ神。

の二句がある。また『図二』にも、竹石没後、竹石の画竹を見て作った「題二竹石道人画竹一」という長篇詩を収める。

文化元年　甲子　三十八歳

○春刊の『石湖先生詩鈔』六巻三冊の校定を、山本緑陰と共に担当する。本書は『放翁先生詩鈔』と同じく、清の周雪蒼・柴錦川編、山本北山閲の和刻本で、やはり北山の〝享和癸亥冬十二月除夜〟の日付のある序文が付されている。

○三月一日、神谷東溪鈔録・柏木如亭較閲の『随園詩話』十二巻六冊（文化元年刊）の序文を撰す。本書は清の袁枚が長期にわたって刊行した『随園詩話』十六巻・『同補遺』十巻より、そこに収められた詩と詩論を分類し抽印したものである。〝文化紀元三月朔詩仏大窪行〟とある詩仏の序のほか、山本北山、大田錦城、佐藤一斎、柏木如亭の序を付する。詩仏は序において、自らの主張する清新性

霊の真詩を、〃地を殊にし時を同じうして〃清の袁枚も主唱しているとして、本書の意義を〃詩将の六韜三略〃と称している。編者の神谷東溪との交遊を示すものとして、年次は未詳だが囮七に「送春神谷東溪宅集」と題する七絶一首がある。

○六月、宋の于済編・蔡正孫増訂の『唐宋聯珠詩格』二十巻五冊を校訂し刊行す。奥附に〃文化元年甲子六月上梓発兌〃とあり、また『割印帳』にも文化元年六月廿五日割印とあるのによるが、本書の版元の一人慶元堂和泉屋庄次郎の手になる「小目」には〃文化二年乙丑春日　書商慶元主人述〃とあり、実際の刊年はずれ込んで文化二年以後か。山本北山の序と、佐藤一斎の〃文化甲子歳孟夏月〃の日付のある序を付するが、北山の序には詩仏の校訂作業にふれる次の様な文がある。

　　迺来江戸の書賈某某等の七家、相謀つて力を戮せ資を醵し、更に新たに版に鏤して、校訂を天民に託し、題辞を余に求む。天民乃ち愛日楼所蔵の元刻本、緑陰茶寮の朝鮮本、平安翻刻の元版本、朝鮮版の翻刻本、活字本、正徳本、巾箱本、別版巾箱本、及び唐宋諸人の本集・総集・選集・別集数十百部を裒め、彼れ此れ較讐し、誤る者は之を正し、訛る者は之を改め、数閱月にして功を竣つて乃ち善本と為る〃　（原漢文）

愛日楼は佐藤一斎の、緑陰茶寮は山本緑陰の居宅の名である。これは詩仏としては大いにつとめた仕事であったろう。

○六月刊（奥附刊記による。但し『割印帳』では文化元年九月四日の割印）の『盛音集』に、七絶「同鞠道人舟中聴虫」・五律「夏晩睡起」・七律「柳絮」の三首を収める。『盛音集』は、書画骨董商でこの年向島に新梅屋敷を開いた佐原鞠塢の編んだ詞華集で、山本北山・大田錦城・葛西因是の序文を付す。その〃享和癸亥小春柳橋鬼史太田元貞才佐撰〃とある錦城の序文には、

　　菩薩（鞠塢のこと）、近ごろ詩仏に従ひて詩を学ぶ。詩仏の詩清新纖麗、美を当今に専らにす。それ古董は古器を鬻ぎて、而して学ぶ所の詩は則ち清新を宗と為す。何ぞその事の相反するや。　（原漢文）

と言い、鞠塢が詩仏の詩弟子であったことがわかる。こうした関係もあってか、新梅屋敷の門には大田南畝の〃花屋敷〃の額をかけ、門の左右には詩仏の筆になる〃春夏秋冬花不断／東西南北客争来〃の聯をかけた。また鞠塢編の『墨水遊覧誌』（文政十一年序）には、次のような詩仏の五律も収められている。

　　題菊塢所居

　　江畔移家得。不嫌生計貧。栽梅三百本。糊口十余人。烏帽堪為画。藍衫大称身。余地君無借。吾来欲卜隣。

△八月十日、柳橋の又新楼において鞠塢の催した会に出席か。この会のこと、『春草堂集』巻十二に収める〃文化改元秋七月二十日秋芳園北野鞠塢識〃という「又新楼雅集請諸君新詩書画引」なる一文によって明らかになる。鞠塢の署名のあるこの文が大田錦城の『春草堂集』に収められているのは、鞠塢の依頼によって錦城が代筆したからであるが、鞠塢は『盛音集』刊行のあと、諸家に新書画を乞うて『展観目録』を刊行しており、今回あらたにその続集を刊行しようと志してこの会をもったという。右の文によれば、北山・鵬斎・錦城・因是の出席を要請してあると言い、鞠塢とのつながりからして、他用さえなければ詩仏も出席したかと思われる。この一文にいう『展観目録』なる書は未見だが、『盛音集』の奥附には、〃新書

画展観目録　春秋二季に乞諸先生の書画を姓名字号及俗称街名までを委く記たる冊也盛音集ノ詩作姓名ヲ委く知す〃と掲げられている。『国書総目録』にはこの書名では検出できないが、『梅荘書院書画展観記』なる書名が伝存未記載のまま『国学者伝記集成』によるとして掲出されている。

○八月十四日、中井菫堂と共に江東の地を逍遙し、隅田川に月を看る。この清遊は、三村竹清「菫堂伝資料」(〈書苑〉第二巻九号)に鈔録される菫堂の詩稿『菫堂集』によって明らかである。まず詩仏の筆になる序が置かれ、以下その日作られた詩仏と菫堂の詩が交互に録されている。詩仏の序は次のように言う。

甲子中秋前一日、訪二菫堂主人於巌桂精舎一。時宿雨新晴、天気清快。主人遊興勃々而生、将レ欲レ延レ余自二萩寺一暮抵二角田川一而看レ月。余辞以レ事。主人曰、好晴難レ再、花期不レ可レ緩。人之在レ世誰能無事。半日之閑不レ偸、何得若且強行。余笑而頷。乃自二柳橋一泛レ舟而出。途中所レ得之詩、随得随録。及レ帰成二数首一、名二秋行奇賞一。　詩仏居士識

以下、随得随録の詩が続くが、ここには省く。かわりに当日の行程をその詩及び詩題から類推して復原しておこう。

菫堂の居は日本橋北浜町(山伏井戸)にあった。柳橋で舟を雇い、堅川に入り二ツ目橋、三ツ目橋、四ツ目橋を過ぎ亀井戸で舟を下り、舟頭には舟を三囲稲荷の方へ回しておくよう命じておいた。二人は歩いて菅神廟(亀戸天満宮)より萩寺(龍眼寺)に遊び、さらに萩寺を出て柳島村請地村の田園風景の中を通って秋葉権現社前の酒家にあがり杯をかわした。酒家を出るとすでに日は暮れており、虫の音を聞きつつ三囲稲荷に至り、待たせてあった舟に乗って隅田川の月を賞しつつ帰宅したのである。

○歳暮、唐の詩人賈島の故事によって、朝川善庵・松井梅屋らと祭詩の詩を作る。山本北山著の『孝経楼詩話』(文化六年刊)巻下の第九十に次の様にいう。

去年文化甲子ノ臘我門ノ大窪行。朝川鼎。松井輔。等祭レ詩ノ詩ヲ作ル亦雅事ナリ(唐ノ賈島常ニ以二歳除一取二一年所レ得詠一祭レ以レ酒日労二吾精神一以レ之補レ之然レドモ未ダ祭詩ノ詩ナシ)

この時の詩仏の詩は『図二』に七律「歳暮」として収められている。

文化二年　乙丑　三十九歳

○二月十五日、中田粲堂の著『名花交叢』の跋文を撰す。『名花交叢』は奥附のない全十二丁の小冊子で、〃化丑春月花盛開日北山居士題　菫堂敬義書〃とある序と、〃乙丑之春花朝之日大窪行書〃とある跋を付す。内容は名花三十種におのおの姓名字号を与え、四清・三貴・八仙・六研・四逸・梵侶・釣侶と分類したもので、蠣崎波響、田中朗卿、中田粲堂、喜多武清、横田汝圭、酒井抱一、谷文晁の画を付し、またそれにちなむ名詩を併せて刻したものである。詩仏の『茶寮図賛』と同じく好事の書物といってよかろう。詩仏の跋文を書き下して引用しておく。

予、嘗昔の夜、閬苑に夢遊し群仙と会す。黄冠紫帽素衣絳裳、粲然として座に満つ。その姓名を問ふと雖も、尽く記すこと能はざるなり。覚むるに及びて異香紛々として去らずして刻を累ぬ。時に友人学古(=中田粲堂)その著す所の名花交叢を携へ来りて見示す。名花三十種の姓名字号尽く備はれり。一々夢中に見る所の人の姓名なり。乃ち熟読数四して記して之を返す。

乙丑の春花朝の日大窪行書す　(原漢文)

囮一には、粲堂との交遊を示す「題水竹居図為滕粲堂」と題する七古一編を収める。水竹居は粲堂の居室の名である。

○二月、伊能忠敬が縁海地図作成のため西国へ発つを送る。囮六に「伊能君曽製二縁海地図一進呈越前以北尾張以東図尽成矣今茲乙丑二月再蒙レ命赴レ西求二予贈言一聊賦二小律一首一送レ之」の詩題で七絶一首を収める。大谷亮吉『伊能忠敬』（大正六年刊）によれば、東海道を経て関西から備前に至る測量のため、忠敬が深川黒江町の居を発ったのは文化二年二月二十五日のことであった。前年の文化元年九月十日に測量の功績によって幕吏として登用され十人扶持を給されて天文方高橋景保のもとに属することになった忠敬は、同年文化元年十二月十五日に、若年寄堀田摂津守より西国筋一円海辺測量の命をうけていたのである。

○三月、詩仏輯・巻菱湖校の『佩文韻府両韻便覧』二巻一帖刊。版元の綺文堂源有周とと須原屋孫七の跋に、本書刊行の事情が次の様に記されている。

先人在世の日、佩文韻府両韻便覧を作すの志有り。之を六如上人に請ふ。上人の西するに及びて稿本を琴台老人に託す。老人即世し、上人も亦た随ひて寂す。その在る所を知らず。周、之を天民先生に謀る。先生乃ち古今の韻書・詩集を取り、裒輯して冊と為す。更にその同遊弘斎先生をして校字の労を助けしむ。蒐羅の博きこと、校証の確かなること、固より向の二老の能く弁じ得る所に非ざる也。因つて剞劂に命じて世に公にし、以て先人の未艾の志を成すと云ふ

文化乙丑春三月　江戸書肆綺文堂源有周謹みて誌す

（原漢文）

ただ、『割印帳』には〃○文化二丑年十二月廿三日割印　佩文韻府両韻便覧　全一冊　曇付四十八丁　文化二丑年十月　天民著　板元売出須原屋孫七〃とあり、実際の刊行は文化三年に入ってからとも思われる。

○三月刊の中島済美編『文孝冊』に詩聖堂主人の名で、「題芝仙竹寿図為」という題の七絶一首を寄す。本書は、川越の人中島済美が老母の七十の賀のため諸名家に詩書画などを徴して一冊となしたもので、山本北山（中井董堂書）の序と、〃文化二年歳在乙丑季春良辰　武蔵邦河肥三芳野里　酔春亭蔵　東都書林　千鐘房刊〃の奥附がある。詩仏の詩のほか、橘千蔭の歌、吉原の遊女滝川・度会・唐琴の歌、海保青陵の文、酒井抱一の句、市川白猿の句、山東京伝の画、鹿都部真顔、木室卯雲、烏亭焉馬の狂歌などを収める。

○春、桐生の佐羽淡斎とともに校定した『方秋厓詩鈔』一冊刊。清の呉之振編『宋詩鈔』をもとに編んだもので、山本北山の序と淡斎の跋を付す。奥附には、〃文化二年乙丑春刻成／江戸書林　須原屋伊八　須原屋孫七／張文潜詩鈔　二冊近刻／佩文韻府遊　両韻便覧　折本一冊近刻〃とある。淡斎との交遊は享和二年以来で、この頃ようやく親密になってきたように思われる。年次は確定できないが、この頃の事であろう。囮五に「佐羽淡斎製二遊舫一艘一中貯二琴書酒茶及釣魚之具一予為名曰二小天随一又係レ之以レ詩云」と題する七絶一首を収める。

※『詩聖堂詩集初編』より、文化三年三月四日の江戸大火罹災以前で、年次は確定できないが、詩仏の交遊関係を示す詩題を、以下に便宜的に分類して列挙しておくことにする。

☆享和より前、すなわち寛政年間のものと思われるもの

△「題二吉田夢鶴所居一」(初三) 吉田夢鶴は秋田の人で、大坂滞在中は混沌社にも参加し(『混沌社唫稿』)詩をよくした。寛政七年に五十二歳で没しており、それ以前、すなわち詩仏が山本北山の伴で秋田へ赴いた寛政五年頃の作ではないかと推定される。

△「訪二六如師嵯峨山居一途中遇レ之」(初五) 六如は享和元年三月十日に没しており、それ以前ということになる。

△「将レ赴二伊勢一途中有レ作先寄二中野子興一」(初三) 「題二子興三畝宅一」(初三) 中野子興(号を桑堂)については、すでに寛政三年・五年の頃で述べたが、あるいはこの二首も寛政七年に詩仏が伊勢に遊んだ時の作か。

☆大名との関係を示すもの

△「陪二神戸侯一遊二高輪別荘一」(初一) 「奉レ送二神戸侯帰国」(初五) 「病中夢二神戸侯一」(初五) 神戸侯は伊勢神戸藩一万五千石の藩主本多氏で、享和三年一月までは本多忠裔、同年二月には忠裔の死没によって忠敬が家督をついだ。「奉レ送二神戸侯帰国」の詩句の中に〝公祖父猗蘭台先生当時名家〟という注があることからして、この神戸侯は荻生徂徠の門人であった猗蘭公本多忠統の孫にあたる本多忠裔であろうか。武鑑によれば神戸藩の下屋敷は高輪にあった。

△「新涼庭瀬侯桐蔭書堂分レ韻賦」(初五) 「秋晩庭瀬侯席上作」(初五) 「奉二送観濤公子之二庭瀬一」(初五) 庭瀬侯は板倉氏、備中庭瀬藩二万石である。ちなみに庭瀬藩士との交遊を示すものとしては「二月廿一日同二海柯亭一東叡山尋レ花」(初六) 「次二森岡介玉客中別レ春香盃体韻一五首」(初七) がある。海柯亭は、庭瀬藩の江戸留守居で江湖詩社にも参加した海野蟹斎の嗣子である。森岡介玉は庭瀬藩の家老森岡松蔭の息子で号を足庵、海野柯亭の実兄である。

☆交遊想定の資料となる題画詩

△「題二細桃女子菊花一」(初三) 細桃は詩仏にとっては師である山本北山の後室今川氏、書画をよくした。

△「題二釧仲孚所画山頂図一」(初三) 釧仲孚は画家釧雲泉。雲泉が江戸へ来たのは享和年間のことで、享和三年冬から湯島切通に住んだという(森銑三氏「釧雲泉雑記」―『著作集』第四巻)。

△「題二平三吉画一」(初五) 平三吉は鏑木雲潭のこと。市河寛斎の次男(すなわち米庵の弟)であるが、谷文晁に従って画を学び、寛政の末年に乞われて画家鏑木梅溪の養嗣となった。

△「題二雙牛図一為二波響主人一」 波響主人は松前侯松前道広の弟で、藩の重臣蠣崎氏を嗣いだ蠣崎波響。宋紫石門下の画人としても有名であった。森銑三氏の「大原左金吾」(『著作集』第七巻)によれば、波響は文化元年頃江戸に滞在しており、あるいはこの頃の作かと思われる。

☆その他

△「二月廿三日与二千蔭春海諸老人一玉川観レ花得二五絶句一」 このこと、目下のところ加藤千蔭・村田春海側の資料には見出せない。絶句に付された注から、小金井の桜をみ、その夜は府中に宿泊したことがわかる。

△「似二白根天祐一」(初一) 白根天祐は未詳。

△「題二内倉舜徒村居一」(初三) この人物も未詳だが、寛政五年

の柏木如亭の手紙に〝まづ十九日は大宮駅の舜徒が宅へ宿し〟という文面がみえ、これに宛てることができるか。

△「瀑布石并序　写山楼主人所レ蔵云得二之紀州一白紋数条如二瀑布一余為名曰二瀑布石一併賦二長篇一首一貽レ之」写山楼主人は谷文晁である。七言二十句のこの長篇の冒頭には、〝我昔西遊到二南紀一〟の句があり、寛政年間の西遊が南紀にまで及んでいることを知ることができる。

△「読二閨秀文姫詩一」(初五)　文姫は山本北山門下の女流詩人大崎文姫、号を小窓といい、竹堤社十才子の一人に数えられた(『五山堂詩話』巻五)。『五山堂詩話』に登場する女流詩人としては、最多の五首の詩を採録されている。

△「送二池五山帰二伊勢寓居一」(初六)　菊池五山が江戸を去って伊勢四日市に赴いたのは、市河寛斎の漢文書簡「与柏永日」(『寛斎先生余稿』所収)によれば、寛政十一年のことである。この詩題をもつ七絶二首は、その後一旦江戸に帰った五山が再び伊勢へ帰ってゆく時、詩仏が送別の詩として贈ったものと思われる。詩中にある〝七年強半漫遊客〟の句からすればそれは、文化二年頃ではないかと推定される。この推定は、五山の江戸帰来が、『寛斎先生遺稿』中の七律「無絃至レ自二五瀬一談詩数日慨然有レ贈」の排列からして文化二年であるという事とも符合している。

△「次二韻白川不破子温梅花一六首」(初六)　不破子温については未詳だが、『詩聖堂詩集二編』巻六に「再和不破子温梅花韻」と題する七律六首を収め、『同書』巻十三に「雪中次東坡韻酬不破梅仙」と題する七律一首を収める。

△「戯題二朝川五鼎新居一」(初六)　朝川五鼎は同じ山本北山門下の儒者朝川善庵である。起句に〝龍閑橋上卜移レ家〟とあり、新居の場所は明らかだが、移転の時期は明らかにしえない。

△「題二浅井観斎新居一」(初七)　浅井観斎については未詳であるが、『詩聖堂詩話』には詩僧冷然の作をもたらした人物として名前があがっている。

(本学専任講師)